

【秘密基地で待ってる】

『部活の後、桜基地で待ってる』

ノートを破いて書いたその手紙を、クラスの女子が私に届けてくれた。

送り主は…。一瞬、目を疑う。

番長？

学年一の悪ガキで、ケンカ好き。先生も女子もよく泣かせる彼。あだ名は当然のように番長だった。中一で同じクラスになり、ちょっかいを出されては、私もむきになって挑んでいた。中二になって、クラスが別れてからは、物足りない毎日を過ごしていた。

桜基地は、通学路の途中にあった。桜並木とは到底言えない、数メートルの桜の密集地帯。満開の時は、桜の中に人が消えていくような錯覚さえおこる、桜の秘密基地のこと。

部活を終えると、なるべく友達とは離れるようにして、走って桜基地へ向かった。

「よお、球拾い部！」

桜の中から番長が姿を現した。バドミントン部の私を、番長はそう言ってからかった。

「これ、やるよ」と、ビニール袋を差し出した。春休みに家族旅行で北海道に行った、お土産のチョコレートらしい。それだけ渡すと、じゃな、と足早に去って行った。

家に着いて、箱を開けようとする、一度開封した形跡があることに気付いた。中には、個別包装してあるチョコレートのお菓子が十枚。一枚取り出してみると、包み紙の後ろに見覚えのある文字が…。「お」と、太いマジックで書かれていた。次の包みを見ると「れ」。順番に取り出してみると

「おれとつきあってくれ」

その時の私の顔こそ「ぼかん」とした顔というのだろう。告白？しかも、こんな形で？

次の瞬間、吹き出して笑ってしまった。笑いながら、急に切なくなりだして、心臓がきゅーっとなるのに、気持ちはぼーっとして、温かいもので満ちてくるのがわかった。

それが、番長に恋に落ちた瞬間だった。

今から、二十年も前のことだ。

「全然、聞いてないし！」

夫の声で我に返った。夫は酒が入り、出来上がった状態。ふてくされて布団に潜った。

久しぶりに花見でも行くか、なんて、珍しく夫が言うもんだから、私は、二十年前のとてつもなく淡い記憶を蘇らせていたのだ。私だって思い出に浸りたい時もある。

朝、起きると、携帯にメールの着信が。

「連れて行ってあげてもいいぞ、桜基地」

夫からのメール。いつのまに？酔っぱらって、夜中に打ったのだろうか。

それにしても…。二十年前と変わらない強引な番長っぷりに、思わず吹き出してしまった。そして、いつものように温かい。私の顔に書いてあったのだろうか。桜基地って。

「行ってあげてもいいよ」と返信してみた。

本当は、桜、見る必要もないんだけど。桜の思い出は一生分、夫が作ってくれたのだから。